

---

# 私と年下王子サマ

橘 亜衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私と年下王子さま

### 【ZPDF】

Z6916Z

### 【作者名】

橘 亜衣

### 【あらすじ】

異世界出身の、香山絵里（21）。そんな彼女に突然結婚話が持ち上がった。だけどお相手はなんと、14歳の王子様！王族、とか、王子様、とか、結婚とか以前に、14歳！？ってことは、中学生！？7歳も年下の旦那様だなんて、絶対に無理！――かといって断ることもできず、彼女は王子のもとに嫁ぐことになりました…。

『 拝啓、日本のお兄様。』

私があなたの元を去つて2年経ちますが、元気にやっていますか？  
私はそれなりに元気にやっています。

2年前のあの日、大学の講義中につたた寝をして、気付いたら異世界に飛ばされた時はどうしようかと思つたし、これは夢だと必死に現実逃避もしました。

だけどそれは現実で。

知らない世界で生きる術のない私は途中、人攫いにあつたり知らないおじさんに売られそうになつたりしたけど、今は心優しい人達に拾われて、幸せに暮らしています。

拾つてくれたのはとある国の貴族の方で、子供がいなかつた2人は私を実の娘のように可愛がつてくれています。

幼いころに両親を亡くした私にとって、2人は間違いなく私の父親と母親という存在です。

いつかお兄様にも会つてほしいと思うけど、やつぱり住む世界が違うから無理ですね。

文字通り、世界、違うから。

そんな両親同然の2人のお願いに、私がどうして断れるでしょう。

実はこの世界、それなりの地位のある人は、20歳までにしかるべき相手に嫁がなければならないという決まり事、のようなものがある。

如何せん、私の家はこの国でも有数の大貴族。

いくら私が養子で、実は異世界出身だとしても、結婚はしないといけないみたいです。

異世界生まれはともかく。もう20歳過ぎてるんですけど、いいんですか？

なんて聞いたら、あなたは幼く見えるから大丈夫。と笑顔で言されました。

確かに、日本で大学生やつてた頃から中学生に間違われるほどの童顔幼児体型だつたけど。そしてそれから2年経つた今とその頃と、大して変わつていなければ。

…喜んでいいのか、正直微妙なところです。

どうやら私、17歳で通つているらしく、相手方にもそれで話をしているから、と言われました。

うん、まあいいんですけど。

考え方によつたら、若く見られるのは女性として喜ばしいこと。ここは素直に喜んでおこうと思います。

それで、問題は嫁ぎ先、なんです。

大貴族ということは、お相手はもちろんそれに見合つた家柄ということ。

聞いてみたら、なんどこの国の王族でした。

はい、もちろん現国王様ではございません。

国王は御年57、もちろん妻である王妃様もご健在です。王様は王妃様一筋なので、愛人や側室を作られたり…なんてことは致しません。

ではなくて。

お相手はその国王様の3番目の息子、アレク王子様です。

王子様と結婚…生まれも育ちもここに来るまでは平民だった私が。まるでシンデレラ…いえ、彼女も実は裕福な家の生まれなので、ちょっと違いますが。

とにかく、相手が王子様というのも十分驚愕の事実ですが、実は問題はそこでもありません。

実は王子様、現在14歳。

ええ、14歳です。

そして私の本当の年は、21歳。

つまり、21歳の私が、あわついとか14歳の王子様に嫁ぐこと

なつたのです。

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。（前書き）

すみません、少し変更しました！！

## 01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。

この世界での両親から、衝撃の事実を告げられてから一週間。

私は今、お城へと向かう馬車の中にいた。

えーと…、もう一回言つておこひ。

結婚の話を告げられてから一週間。

なのに、既に私は今日から、王子様のお嫁さんとして、お城に入ります。

…なんか、早くない？

だって普通は、こひ、準備とか、色々あるものでしょ？

嫁入り道具のセットの準備とか、心の準備とかその他もうもひ。

それともこの期間の短さは、この世界では普通なの？

と聞くと、いや、早いと真顔で母様に言われた。

いいんですけどね、どうせ何週間経つたところで、腹はくくれないだろうし。

それに私の嫁入りセットは、おいおい家から送られてくるやうだし。

そんな訳で、実質この身一つで王子様の元へ向かっているんだけど。

私、ある重大な事に気が付きました。

なんで今！？つて自分でツツツ「ミミを入れてしまつほど、初歩的な事実。  
けれど、それを聞かぬまま王子にお会いできない。

「あの、リースン、つかぬことを伺いますが」

すると、私の前に座つてゐる、銀髪ツインテール美少女が「何でし  
ょうか」と言つた。

彼女は私についている侍女で、結婚しても一生お仕えします、とい  
うことなので、こつして彼女を連れて行くことになった。

性格はすぐ面倒見が良くて、口ではなんだかんだ言いながらも優  
しい少女。

だけどさすがの彼女も、私のこの質問には呆れるんじやないか…。  
心に不安がよぎる。でも…って、ああもう、考へてる場合じやない  
ぞ、私！

私は勇気を振り絞ると、リースンにとある質問をした。

「私の嫁ぐ、第3王子アレク様つて……誰ですか？」

その時確かに、時は止まりました。

リースンが驚愕のあまり、大きな目を更に大きく見開いて。  
口は心なしか半開きで、まるで息がとまつたかのよう。

うわあ、美人はどんな顔でも美人だなあなんて見惚れないと、は  
つと我に返つたのか。

きっと厳しい顔になると、私を険しい目で睨んだ。

「Hリ様。今日は一休どういう日かご存知ですか？」

美人の怒りの迫力に。私はびくりと体をすくませた。

「う、はい。王子様との結婚式の日です」

私が身に纏っているのは、纖細な刺繡が施された白のドレス。いわゆるウエディングドレスだ。

首元には、何カラットあるんだろう…って思つほどの大好きなダイヤが付いた首飾り。

肩まであつた髪の毛は結われ、頭の上にはキラキラひかるティアラ。どこからどう見ても、花嫁さんスタイル。

「では、今はどういう状況かお分かりになりますか？」

「…今は、お城へと向かう真っ最中です」

するどリースンが、はあああ、と、ものすくべ呆れたよつに長いため息をついた。

「それで、アレク王子を存じないと、どういう意味なのですの？」

「えつと、だつてこの国には、第1王子と第2王子、それに第1王女様しかいなはづですよね？なのに第3王子つて、一体誰のことなんだろ？…って思いまして……」

14歳つて、元の世界でいえば、中学生じゃない！？反抗期真っ盛りの、学ラン着ているような。

どうしよう、そんな人と結婚するなんて、しかも7歳も年下だし、犯罪だよね！？

間違いなくロリコンだよね！？

…つて、1週間混乱しまくっていたおかげで気付かなかつたのだ。

第3王子様つていう存在を、私が知らないことに。

01 嫁入りする前に、ある重大なことに気が付きました。（後書き）

今日は結婚式当日。

エリさんは、花嫁衣装です。

「…………」

む、無言の沈黙が怖い。突き刺さる視線が痛い。

ちらりとリースンの方を見ると、彼女は眉をひそめながら頭を抱えていました。

その顔にはありありと、

(どうしてくれようかこの人は)

つて、書いてあった。くつきりと。

これはきっと、結婚が決まつたつていうその時に聞いておくべきことで、お嫁に行く当日に尋ねることじゃない。

ほんとうに、この一週間錯乱しそぎだよ、私。

やがて、ややあつてリースンが口を開いた。

「そう、でしたわね…。考えてみれば、エリ様がこちらにいらしたのは2年前。でしたらアレク様のことを存じではなくても仕方ありませんわ」

ちなみにリースンは、私が異世界からやつてきた、って知ってる数少ない人間の一人。

この世界でそのことを知っているのは、リースンと、それから母様

と父様だけ。

「ですが、そういうことはもう少し早くお気づきになるべきですわ」「はい、すみません…。14歳つていう衝撃の年齢に思いのほか意識がいつてしまいまして」

私はぺこりと素直に頭を下げる。

全くもって彼女の言づ通りだから。

でもさすがに情報皆無状態でお会いするのはどうかと…。

かといって今更ながらなこんなこと、リースン以外に聞けないし…。

つて顔をしてたら、勿論リースンはきちんと教えてくれました。

ため息まじりに、だつたけど。

「この国には、エリ様がご存じの通り、お2人の王子とお1人の王女様がいらっしゃいます。ですが実はその下にもう1人王子がいるのです。それが第3王子アレク様…エリ様の嫁がれる方ですわ」「でも、私、知らなかつたんですね。それにそんな話も聞いたことがなかつたですし」

他の王族の方はもちろん、知つていたんだけど。  
だから王族に嫁ぐつて聞いた時、てっきりそのどちらかの王子様だ  
と思ってた。

でも考えてみたら2人とも、もつ20は超えてるし。

しかも3番目の王子…って、え、誰それ？みたいな結論に至つたの

がついたりもだつたといつ、なんとも残念な私の頭。

「アレク様はエリ様がこの世界に来られた2年前に、他国へ留学なさいました。それからこの国には一度も帰られておりませんわ。ですからエリ様がこの存じないのも無理はありません」

なるほど、つまり私と入れ違いにここから出て行ったのね。

道理で知らないはずだよ。

それにもしても、2年前…つていうことは、12歳があ。その歳で、他の国に留学だなんて、たいしたものだよ、つん。

私が12歳の頃なんて…小学生でしょう？お兄ちゃんに夏休みの宿題を全部押しつけてたような、ダメダメ生徒の模範のような子供だったよ。

あの時は、まるまる一ヶ月分の日記を丸投げしてごめんね、お兄ちゃん。

それにもしても、この国の王族はみんなそうなのかな？そんな、そんな年齢から留学とか。

そう聞くと、彼女は首を横に振った。

「そんなことはありませんわ。現に留学されたのは、アレク様だけですもの」

聞けばアレク王子、幼い頃から『神童』と呼ばれる程の切れ者で、その実力は王様をはじめとした城の者全員が認めるほど。

もつと彼の才能を伸ばすため、そして更なる知識を増やし、見聞を広めることを、将来国を背負つて立つ国王としては必要な事だろう。ところことで、満場一致で12歳とこつ年齢ながら他国へやつたそうだ。

「…………」

今、あつさつと聞を流せなに単語を耳にしたよ。

知識習得のため、見聞を広めるため。それは分かつた。

けれどその後。

将来国を背負つて立つ、『国王』

だって、第3王子でしょ？ 3番目でしょ？ 後を継ぐのは、こいつ。いつ、普通は長男である第1王子なんじゃないの？？？

「いえ、この国の王位第1継承権は、アレク様ですわよ。」

聞き間違いであつてほしい。そんな私の願いをあつさつと砕くよ。に、リースンはきつぱり言に切つた。

私が、なぜ、なんて聞く間もなく、リースンは理由を口にする。

「だって神童ですよ？ それに、その歳で、既に国政の一部を担つ

ていたのです。次期国王として、これほど粗心の方はいらっしゃいませんわ」

えと、……つまり、私の旦那様は未来の王様で、私はそんな方の妻。

それって、私が次期王妃っていうこと、なんでしょうか…？

私の顔に浮かんだ疑問を読み取ったのか、リースンは二くりと頷く

と、

「その通りですわ」

そう答えた。

……………「いや、私は、年齢差に気を取られ過ぎていて、とても大変な立ち位置に立たされていることを、今更ながら認識致しました。

## 02 HINのJAPを、教えてトロコ。（後書き）

肝心の王子様が出てくるのは… もう少しだけ、先です。

### 03 おおあたんですかり、覚悟を決めましょう私。（前書き）

私の小説を閲覧していただき、ありがとうございます！！！  
お気に入りも100件を超えたみたいで、嬉しいの一言です！！！  
本当にありがとうございます！！！  
(0-1を少し変更しました…)

### 03 ジャンダルムですから、覚悟を決めましょ「私」

国王とは、国のトップに君臨するお方。

その妻は、王妃と呼ばれる。

：14歳の次期国王と、異世界出身21歳の未来の王妃。

現国王様は、若くはないし、失礼な話だけど、病氣で…なんて今すぐなつてもおかしくない。

そうなつたらすぐここでもアレク王子が国王になる訳で。

いぐり神童、なんて言われてたつて、まだ14歳の少年でしょう？しかも、それを側で支える妻が、この世界のことを、まだあまり理解できない私。

私の頭に浮かんできたことは、一つ。

大丈夫なのかな、この国。

だけど、私はそんな未来のことを心配してこる場合ではなかつたのです。

がたんがたん、と、道を走る馬車の車輪、そして馬の蹄の音しか聞こえなかつた中に。

ざわざわと。

人の声がし出した。

それも、お城へ近づくにつれ、その音が大きくなつてこる。

「？なにか、人がたくさん集まっている気配がしますね」「当たり前ですわ。だって未来の国王の結婚式ですよ？これは國家の1大イベントですもの。國中から一目見ようと、國民が集まっていますわ」

1大イベント。確かに。

日本でいえば、皇太子の結婚式、みたいなものだよね。後はイギリスとか他の国でも大々的にやってたつて。テレビでも、生放送、とかで。

やばい、今自分がその中心にいるかと思つと、途端にドキドキしてきた……！

だって、私、容姿も普通の平々凡々人間だし、そんな、注目される人生送つてきていないですから！

そんな私の緊張をよそに、ざわめきが大きくなるなか、馬車は静かに止まつた。

馬車の扉がゆっくりと開く。

まず田に飛び込んだのは……。

どこまでも続く、真っ赤な長い絨毯。

そして。

割れんばかり、大音量のラッパのファンファーレ。

「未来の王妃、エリ様がご到着されました！！」

そして高らかに宣言される男性の声に合わせて、カーペットの両側に立つ兵士たちが一斉に敬礼をした。ここでひと際大きくなる歓声。

「うう…」

き、消えて、しまいたい。なんなの、この大層なお出迎えは。

大袈裟すぎやありませんか！？

私に、あのレッドカーペットを渡れと？周りが大注目の中？

こんなのは、生で見るの初めてだよ。ハリウッドスターがキラキラ笑顔を振りまきながら通る、そんなやつだよね？

「リースン、私無理」

「何を今更」

「だつて、私今日10センチヒールですし！…こけますって…！…みんなに人が見てる中それをするとと思うと、恥ずかしいじゃないですか！？」

しかもドレスの裾は、恐ろしく長い。私の身長分はあります。

私の夢は、外国の小さな教会で、慎ましやかな結婚式をあげることだったのに。

まあ外国っていうのは、あながち間違ってはいませんが。スケールが大きすぎる。

全然慎まじやかじやない。むじう真逆をこつこつこの感じ。

私が必死の形相で訴えてみたけれど、侍女は満面の笑みを浮かべてスルー。

手早い手つきでベールを私の頭にかぶせると、

「エリ様。まあ、覚悟を決めて、行きますわよ！」  
「ああ」

勢いよく後ろを押されて、私の体は外に投げ出された。  
うわあ、こける……しかも顔面から……って思っていたら、誰かが私をナイスキャッチ。

「怪我はない？ 可愛いマドモアゼル」

さりげとそんな台詞を、甘やかな声で言つたのは、第1王子のハーベイ様。

灰色の相貌で私を見つめると、その端正な顔立ちに蕩けるよつな微笑みを浮かべた。

ああ、眩しくて溶けてしまつそつ……

そんなことを考えていると、王子は私の左手を自分の右手と重ねる。

「…？」

え、なんですか、この状況。なぜに第1王子様が私の手を？

なんて思いながらぽかんと王子の顔を見ていると、不意に反対の手を誰かに掬われた。

「え」

今度は何事なの、と思つてそちらを見れば、短く刈り込んだアッシュの髪と瞳を持つ第2王子、マースト王子が無言で立つていた。

ハーベイ王子と同様、こちらも田元涼やかな、やはり美形。

「エリ様、行こう、アレクがお待ちかねだよ」

私よりも1オクターブ高い声に振り返れば、流れるような亞麻色の髪をウェーブさせた美少女、第1王女マリア様の姿が。

そしてこちらも超が付く程の美少女。

…この世界に来てから思つてたんですが、何気に美形率が高いです。

その中でも王家の血筋は格別で。

王様はもとより、王妃様は若い頃は国一番と謳われる程の美人さんだったそう。

そんな訳で、その血を色濃く受け継いだ王子王女様方は、私のような者が直視するのは畏れ多いほどの美貌の持ち主。

そんな王子2人に両手を取られ、ドレスの裾を王女様とこれまた麗しの侍女リースンに持たれ。

更にもう一度後ろを振り返れば、ひしめくほどの、大勢の観衆の皆

様の姿が。

分かります、ええ、感じますとも！！  
皆が私に注目しているのが嫌と言う程！

…ええい、もう、こうなつたら行くしかないじゃないですか！！

両隣りに人が付いているんだから、転びそうになつても助けてくれるだろうし。

私は、2人の王子にエスコートされ、王女と侍女に裾持ちをされ、大勢の観衆に見守られながら足を一步、踏み出しました。

03 いよいよ結婚式が始まります。  
（後書き）

## 04 永遠の愛を、誓つてしましました。 (前書き)

読んでいただきていよいよ様、誠にありがとうございます。  
よつやく、肝心の王子様がちょびつと、出でました…！

## 04 永遠の愛を、誓つてしましました。

長い長いそのカーペットの先は、お城の大広間につながつていて。そこには今までいた兵士とお城の侍女たちの代わりに、今度は貴族の皆様がずらりと勢ぞろい。

顔を見たことないような方から、前に視線を向けるにつれ、私でも名前を知っている大貴族の方々が見えました。

わざわざまでの喧騒が嘘のよう、中はしんと静まり返つていて。

ため息一つこぼせない程の静寂。

その時。

私が入口に立つたのと同時に、元いた世界でもお馴染みのあの音楽が、大音量で鳴り響いた。

タタタターン、タタタターン、から始まる、結婚行進曲。

しかも、広間の隅の方で控えていたらしい、オーケストラの生演奏。世界は違つても結婚式での入場の音楽は一緒だなんて、なんだか不思議な気がする。

ふつと気付くと、西隣りにいた王子の姿はなくて、代わりに立つていたのは私の父様。

父様は私をじつと見ると、ふわりと優しく微笑んだ。

言葉はなかつた。けれどその瞳は言つていた。

(大丈夫、何も心配することはない)

そんなに私、不安そうな顔してたかな????

うん、してたかも。だって顔も初めて見る相手、しかもその存在をきちんと認識したのもついさっきっていう状態で。

その上相手は7歳年下の次期国王様。

動搖しない方がおかしいと思う。

けれど、その顔を見て私の心は少し軽くなつたみたい。

ありがとうございます、父様。私もそんな気持ちを込めて微笑み返した。

礼服、のようなものに身を包んだ父様と私は、その後仲良く腕を組んで参列者たちの間を通り抜ける。

…そういうば、お兄ちゃん言つてたなあ。

俺が父親の代わりに、ウェディングドレスを着たお前と一緒に花道を歩くんだからなーーって。

だけど、ごめんなさい。

それはもう無理みたいですね。この世界にはいない兄に、心の中でそつと謝った。

そして。

広間の終着点に立つてゐる、一人の人間。

白いタキシードを着た、金色の髪の毛をした人の姿が、そこにはありました。

「……っ！－」

ベールで視界がぼやけて顔ははつきり見えないけれど。

絶対、絶対あの人だよね、アレク王子つて。  
だつて白い服着てるし！祭壇の前で立つて私を待つ人なんて、新郎  
しかいないよね！？

顔が見えそうになつた瞬間、私は思わずベールの下で顔をうつむか  
せる。

14歳、この人が、14歳の王子様…。

見たいような見たくないような、そんな複雑な心境で。

どうせこれから先嫌と言つほど顔を合わせるだらうのに、私はささ  
やかな抵抗を試みる。

さつき不安を軽くしてもらつたばかりだけど、やつぱり実際目の前  
にするとそうもいかないみたい。

心がざわめく私をよそに、ついに父様から王子の手に私がバトンタ  
ツチされた。

その手が驚くほど冷たくて。一瞬体をびくりとさせる。

私は王子に手を握られ、目の前の階段を一步、また一步と昇る。

なんだか死刑台に向かう気分… とまでは絶望的なものではないんだけれど。

他の花嫁さんたちと同じ、幸せな気持ち、には程遠いのは確か。

階段の先には祭壇があつて、牧師さん… よろしく、国王様が神妙な面持ちで立っていました。

ゆっくりとホールドアウトしていく音楽。

それと共に再びあの静寂が戻ってきた。

張り詰めた空氣に、私は再び緊張していくのを感じる。

やがて、王様が厳かな声で言葉を発した。

「アレク・ガイナ・ブリストル、汝、病める時も健やかなる時も、共に歩み、死が二人を分かつまで、愛を誓い、妻を想い、妻のみに添つことを、エルミニ王國国王の名のもとに、誓うか？」

「はい、誓います」

隣から発せられた声は、まだ少年の名残を残した、少し甲高い声。

声を聞いて思ひ。やっぱり彼は、王子はまだ14歳だって、改めて実感させられる。

次は私の番、です。

「エリ・サイレン・シルバーナ、汝、病める時も健やかなる時も、

共に歩み、死が一人を分かつまで、愛を誓い、夫を想い、夫のみに添つことを、エルミー王国国王の名のもとに、誓つか？」

… ここで、誓いません、なんて言ひたらどうなるんだね？って考えるけど、勿論言いませんよ？  
空気はきちんと読めますから。

「はい、誓います」

声が少し裏返つてしまつたのは、大目に見てください。

それから次は、指輪の交換。

なぜかサイズがぴったりの銀の指輪。  
いつ、どのタイミングで測つたんだろう。あつらえたみたいに、しつくりと指になじむ。

それに対して、王子様、女の私が憎らしくなるくらい、細くて綺麗な指をしてる。色白だし。

私と同じぐらいこのサイズなんじゃないんだろうが、これ…。

いくら年下とはいっても、これはかなりへこむかも…。

そんな複雑な思いの中交換タイムも終了し。

最後に。

やつぱりと書つべきか結婚式と言えばおなじみの、あれが最後に待ち受けっていました。

「それでは、2人、誓いのキスを」

#### 04 永遠の愛を、誓つてしまひました。 (後書き)

結婚式…出たことがないので、こんな感じかな、と思いつながら書きました。  
難しいですね…。

## 05 もちかまさか、まさかです！

キス。

もちろん21年生きてきて、これがまさかのファーストではありますせん。

ええ、ありませんとも。

ちなみに私の初めでは、隣の家のダンジンちゃんだという話。でもじいちゃんとのそれなんて私が赤ちゃんの時だつていつんだから、まったく覚えていない。

といつことせ、実質これが私の初めの……つことになります。

恋人いな歴＝彼氏いな歴つていう可哀そつな私なんだから、仕方ないこと。

……だつて、正直日々を生きて行くのに精いっぱいで、恋とか愛とかしている暇なかつたし。

その貴重な一度目が、まさか今だなんて！－

向かい合つた私のベールが、そつとほがされる。

…つまり、ここで初めて件の王子様と初対面となるのですよ。

いつまでも顔を床に向けている訳にもいかない。

私は意を決して前を見据えました。

「……」

予想はしました。

あれだけ美女勢ぞろいの家系なんだから、アレク王子もその例から洩れないと。

実際初めて見た王子は、金髪碧眼、容姿端麗、その上位からやつてくるのか、キラキラ光る光の粒子をまき散らした笑顔は、破壊力抜群。

ただ。

か、か、可愛すぎる…！

おじぎ話に出てくるような、理想的な白馬の王子様…に、あと何年か経てばなりそうだけど、今のところはその予備軍。

天使のような外見の美少年。はい、少年です。

14歳だ、もう驚くほど、その年齢通りのお姿で。

身長も、私とあまり変わらない。

これが、例えば第2王子のマエスト様みたいに、年齢より老け…じやなかつた、大人っぽく見えるタイプだつたらまだ、私の中でも色々ふつきたかもしれないけれど。

駄目、私の精神は、そこまで強くありません。

そんなことを考えているうち、王子の顔が近づいてくる。ゆつくりと、私の脣を田指して。

そして。

目を閉じるつていう暗黙のルールすら忘れていた私は、アレク王子を凝視したまま、口付けをされていました。

……その後は、あんまり覚えていなくて。

ただ、真っ白になつて完全にショートした頭で、それでも笑顔を作つて、お城の下にいた大勢の人たちにお披露目をし、馬車で王子と共に街にある中央広場をぐるりと一周して。

それはなんとなく記憶にあります。

けれどひどく体力気力共に消耗していて、あてがわれた部屋に戻つてから私は、そのままベッドに倒れこんで。

そこから記憶がぱつたり途切れました。

小鳥の鳴く声。

甲高いさえずりが聞こえて、私はふと、目を覚ました。

「う……」

まず飛び込んで来たのは眩しい日の光。

「あ、さう？」

あれ、昨日私どうしたんだっけ……？

私は寝起きの頭を必死に回転させて、記憶を掘り起こす。

確か式が終わった後、色々キャパがオーバーして、それに疲れてたのもあって、ドレスを脱いでそのままベッドに直行だつた気がする。

そして一回も目を覚ますことなく、熟睡。

で、今に至る。

「ん……」

隣で寝ていた人が、軽く身じろぎをする。

「…………え？？？」

ちょっと待つて、私の隣で、寝ている、人？

太陽の光でキラキラ光る金の髪を持つその少年は、とても見覚えのある人物で。

「え、何なんですか、この状況

待つて、待つて、待つて！－！

私はがばっと毛布をめくる。

私は、なんかベビードールみたいなひらひらフリルのついた服を着ていて。

これは部屋にあつたもので、他に着るものもなかつたし、とにかく早く休みたかったからつであまり深く考えずに着た。

こうして明るいところみると、恥ずかしいですが。  
なんか、透けてますし。

そして少年の方はこうと……なぜか一糸纏わぬ生まれたままの姿……。

「うわあああ……！」

私は思わず毛布をかけなおす。

え、何、これって、あれ？？？あれなの？？？

私、中学生のような男の子相手にアレなの？？？

アレしたの！？！？

だって、昨日はそのまま寝て、私一回も起きなかつたよねー？

寝るときは、確かに一人だつたよ、ね？？？

ひとりあたふたしていると、田を覚ましたのか、少年がゆっくりと目を開いた。

ふわふわの髪にひょっこり寝癖を付けた可愛らしい彼は、私を見て微笑む。

「エリさん、おはよう

それから、彼はそのあどけない顔をぱっと赤らめて、少し顔を赤らめながら視線を逸らした。

え、この感じ、何ですか？

彼、なぜかもじもじしてますし。

もしかして、私、少女マンガとかドラマでおなじみの、あのベタベタなシーンですか！？

ほら、よくあるじゃない、鳥の声で目が覚めて、恋人たちが2人、ベッドの上で田を覚ます、的な。

2人とも、あられもない姿で、的な。

的な。

もしかしてそんなお約束な展開ですか！？

未成年相手に？

しかもこの反応、私から「いやいや」になん感じで！？

その瞬間、私の口から言葉にならない大絶叫が、お城中に響き渡りました。

## 05 もむかさまか、まさかですー！（後書き）

なんてベタな展開（笑）  
それにしても長かったです。  
ようやく王子様の顔が出せました。  
これからHリさんとたくさん絡ませてあげたいです

## 05・5 アレクの独白（前書き）

アレク王子の心中です。

## 05・5 アレクの独白

今日とこいつ日を、僕は心待ちにしてたんだ。

2年前のあの日、あの人と出会った時、僕は柄にもなく、運命の女神様ついているのかなって思った。

今までモノクロだったのに、急に色が付いたみたいに鮮やかに世界が見えて。

あの人のことを考えただけで、胸が苦しくなって。

これが、この感情が、世間でいう『恋』だって気が付くのに、時間はからなかった。

おかしいよね。

そんな感情、今までくだらないって考えてた僕なのに。

気付いたら、僕はすぐに動き出していた。

彼女のことを探べて、国王を説得して、彼女との結婚を約束させて。

あの人と結婚できる！

そう思つたら、たつてもたつてもいられなくて、本当は4年だった留学期間を、2年で成果を出してここに戻ってきた。

よつやくあの人と会える、って喜んでいたのに、彼女は私の最中もずっと上の空。

しかも、記念すべき初めての田元、Hリさんは僕を残して一人夢の中。

こんなのが、許せないよね？

だから僕は、夜中にこいつを忍び込んで、寝顔を見て。その時ちよつとしたいたずらを思いついたんだ。

もし、一緒にベッドにもぐつて、それに気づいたらHリさん、どんな顔するかな。

それが見たくて、僕はそつと体を忍び込ませた。

それから朝になつて。

僕の方は浅い眠りだから、Hリさんが起きたのもすぐに分かった。

だけど彼女がしばらく動搖しているのが気配で感じられたから、そのまま寝たふりをしていた。

それからタイミングを見計りつけて、僕は田元を覚ます。

予想通り。

何があつたか分からないつて顔。

だから、僕は顔を赤らめて、ちょっとほにかんだ顔をしてみせた。

そしたらHリさん、そういう感じで勘違いをしてくれた。

だけど悲しいかな。

僕の見たかったものと、それは少し違つてて。

あの人の顔に浮かんでいたのは、恥ずかしさ、とかそういうもののじやなくて。

自分に対する罪悪感と、僕に対する罪悪感。

年下の僕に手を出してしまつたらじつに對しての。

その瞬間、僕は悟つた。

この人は、僕をそういう対象として見てくれてないつて。

年の差なんて関係ない。僕はそれでもエリさんがいいつて思つたんだから。

だけど彼女はそうじやないみたいだ。

そのことをまづいつ感じられて、少し悲しい気持ちになつたけど。

今はそれでも構わない。

一緒にいられるのなら、それでいい。

それだけで、僕は幸せだって思えるんだから……。

## 06 誠心誠意、謝罪しましょ。\*

「うわああ、私、最悪……」

この世から消えてしまいたい。最低、まさかあんな可憐らしき王子様に手を出すなんて……！

元いた世界だつたら、完全に犯罪者ですよね、私。

一応好みは年上男性のはずなのに。

そういうシヨタコソの気はなかつたはずなのに！

しかもあの後勇氣を出して色々聞くと、ビリやら私は「激しかつた」らしく。

…その上、シーツの上には血痕が。

なかつたことにしてしまいたい。

そうしてしまいたい。

いや、その、世間一般的に、昨日は結婚した一人の初夜、ということで、そういうアレが行われるのはむしろ当たり前なのかも知れなわけです。

何度もいうように、相手は年端もいかない7歳年下の少年ですよ！そんなあどけない彼にあんな顔をさせるなんて、私は大人として失格です！

しかも覚えていないとか…。

ああもう無理、立ち直れない…。

王子が何も言わずに出て行つたあと、私が部屋の隅つゝで「づくまつて」と、扉がドンドンとノックされる音が。

声を出す気になれず、無言でいると、問答無用で開けられた。  
…ならノックする必要はあつたのかな。

そしてそんな無遠慮な事をするのは、私の知る限り一人しかいない訳で。

見覚えのある銀色の頭がひょっこり見えました。

「Hリ様、もうお昼ですわよー起きていらっしゃるのなら返事ぐらいいなさつて下さいな」

「リースン」

トゲトゲしい声でそつと囁いた彼女だけど、私の憔悴した様子を見ると顔色を変えた。

「い、一体どうされたんですか？そんな部屋の端で小さくなられて。もしかして、具合が悪いんですねー？」

彼女が心配そうに近づいてくる。その姿を目にした瞬間、私は…。

「うー、リースン、どうしよう…私、極悪人になつてしまいましたー！」

私はすがるようにロースンに泣きついて、わざわざ起しつた出来立てほやほやの事件について語つたんだけど。

## 結論。

彼女は取り合ってくれませんでした。

そんなの、夫婦になつたんだから当たり前、だの、王子ももう14歳で子供も作れる年齢だから気にすることはない、なんて軽くあしらわれたんですが。

いやいやいやいや、確かに正論ですよ~至極じきともな意見ですが。

いや、ね?心がもやもやするとこいつか、元の世界でいつたら、学生着てている男の子に悪戯するもんですよ?

日本なら絶対、なんせやう罪とかで捕まるつじ。

それからずつと、頭をひねりながらじつすればいいか考えたけれど。

だめだ、何も思いつかない。

ただひとつ思いだしたことがあつて。

…やつにえは私、きちんと王子に謝つたつけ???

自分がしでかした罪の大きさで頭がいっぱいです、ちゃんと謝罪をしていなかつたことに今更ながら思い当たる。

ならば、私が今すぐこぐれまいよ。

私は出された朝「はん兼匂」はんもやいに洗ませぬと、アレク王子に会つべく慌てて部屋を飛び出しました。

王子の居場所を聞くと、今はちょうど血煙に戻つてゐる、ところへいとだったので、そちらへ足を向ける。

部屋の外でリースンを待機させて、私は一人中に入る。

そして体を中に滑り込ませると、私はまず頭を下げて開口一番謝罪の言葉を口にした。

「謝つて済む問題ではない」とは、十分承知の上です。許してほしいだなんて言こません。ただ、どうしてわざわざとお詫びしないと、と思いまして」

「……つく」

王子の声がかすかに震えてくる。  
まさか昨日のこと思い出して泣いているんだよ……？

不安になつた私は、頭をあげて……つて、あれ？

なんか、思つてたのと違つ。

王子は下を向いて、肩を震わせて…そこから声が漏れていで。

その声は徐々に大きくなつて。

そしてどう聞えても、それは泣き声ではなく。

「はつはつは、ふ、ふふふ、あ、ああ、ちよつと待つて…あつは  
つはつは」

じらえきれずに大声になつた王子は。

…目に涙をためながら笑つておいででした。

「あ、あの」

あれ、今笑いじらつてあつたつけ???

私がぽかんとしていると、王子は眼のふちにたまつた涙を拭きながら言つた。

「まさか、今朝のあれ、本氣にした?」

未だ声をひきつらせながら、王子がそう尋ねる。

私の頭にひたすら浮かびまくるクエスチョンマーク達。本氣も何も、あれだけ状況証拠が揃つてている状態で…。

田を点していると、アレク様が驚くべき発言をした。

「あれね、全部嘘だから」「嘘！？」

——  
噓！？

なんですか！？

「え、でも、アレク様、服着ていなかつたですし」

・ハルヒ

悪ひれもなくそう詰つ

「だつて、顔を赤らめたり視線を逸らしたり」

あれは演技

何それ！？

「それに、激しかつたつて

## エリさんの寝相がね

確かに私の寝相は悪い。キングサイズのベッドから転げ落ちることもしばしば。

でも。

「じゃ、じゃああの血は

「あれは寝返りを打ったエリさんの爪が、僕の腕を引っ搔いたから」

そう言って見せられたのは、なるほど、確かに誰かに引っかかれた  
ような痕がある。

「それでは、つまつ

すると、アレク様は天使のような無邪気な微笑みを浮かべながら、さうじと仰いました。

「もちろん、エツさんが勘違いするように僕がわざと仕向けたことだよ」

## 〇 7 向愛わむは、罪深きものです。

現在の状況。

今朝起ひつたあれ、実は王子様の狂言だつたことが分かりました。

「ちょっと待つて下れこーー！」

私は思わず王子に詰め寄る。

「なんでもそんなことをするんですか！？」

私は大変なことをしでかしてしまつた……と思つて色々悩みまくつていたのに……

これは一体どうこいつとですかー？

大人をからかうもんじゃ ありませんよー？

だけど王子は怒り狂う私をみても、なんら反省の色もありません。それどころか悪びれる様子もなく、しつとした様子で言いました。

「え、ただびくつむかくつと思つて」

ええ、ええ、確かに田ん玉ひくつ返るくらこ驚きましたよ。

道理で記憶がないはずだ。だって本当に何もなかつたんだから。

とりあえず、自分が犯罪者にならなくてよかつたとそこは一安心だけど、これは7歳も年上の私としては、きつちりと叱らなこと。

「アレク様、やつていい冗談と悪い冗談がござります。アレク様がしたことは、間違いなく悪い方です」

すると、王子は私が怒っている様子を確認すると、急に顔を曇らせた。

「……「めんね、もしかして、怒った？」

青の瞳をうつりむせ、じくじくと横に首をかしげる仕草。しかも、今王子は椅子に座つて私を見上げている状態な訳で。

「「「」」

い、いかんよ、私、流されたら。

「へへ王子がとてもなく愛らしい美少年だとしても、これは許せる問題じゃなんだから。

悪いことは悪いって叱る大人がいないと……

自分でにやう言い聞かせ、必死に抵抗してみるも……。

「やうだよね、本当は昨日、ヒリさんに会えるの楽しみにしてたのに、あんまり話せなくて。それで式が終わつたらいっぱい話そうと思つてたのに肝心のヒリさんは寝てたから。なんだか僕、悲しくなつちゃつて。だから、ちょっと困らせてやるつて思つたんだけど……。ほんとうに「めんなさい」

大きな瞳が少し赤くなり、今にも泣き出しそうなこの表情。なんだか私が、かよわい子供をいじめたような気分に……。

あーうー、頭の上に、ワンちゃんのじゅんと垂れ下がった耳が見えるよ。

そんな顔されたら、そんなポーズされたら…。

「…………まあ、次からは気を付けてください」

はい、降参です。

白旗を振りました。

無理でした。

これがその辺の生意気盛りの子供だったら絶対に許さないけど、相手が悪かった。

絶対に分かつてやつてるだらう、そのポーズ！

つて思つても、その愛らし魅力に負けてしまつ弱い私…。

ああ、可愛いつてホント罷。

それに、確かに王子のやつたことはかなり悪質なものだけど、私もそもそも悪いんだし。

うん、そう。王子だけを責められることじやない。

そつ結論付けることにした。

それにも。

さつきは謝ることしか頭になかったから気付かなかつたんだけど。

私はあらためて部屋の中を見渡す。

もちろん嫁いできた私の部屋よりは広い。なんせ次期国王様ですか  
ら。

なんだけど。

私が目を見張つてるのは部屋の広さでも、華美な装飾品の数々で  
もなく。

部屋いっぱいに広がる、書類や本の山。

王子の目の前には大量の紙が広げられており、莫大な数の本が入り  
そうなほどの大きな棚から、それでも足りないのか、入りきらない  
分が床に積み重なつていて。

ソファやキャビネットの上もそれは同様。

果てはベッドの上にも束がある。

ここに来て2年、文字は日本語とは違つていたけど、勉強したので  
それなりに読み書きはできるようになつた。今じゃ一般的の書物ぐ  
らいは読めるんだけど、田の前の机の上にある書類の文字は、一見  
しただけでも難しそうな単語がちらほら。

「アレク様、これらは一体…」

私が部屋中に散りばめられたそれらを見ながら尋ねると、王子はバ

シのわるこよくな笑いを浮かべた。

「「めんね、僕の部屋、散らかってるよね」

「「え、そういうことではなくて」

「一体何なんですか、と尋ねようとした口を開く前に、後ろの扉が乱暴に開け放たれた。

「アレク、悪い、ちょっとといいかな？」

髪を振り乱し入ってこられたのは、ハーベイ王子。

昨日のきらびやかな衣装とはつゝて変わって地味な装いだけじ、これもまた素敵。

イケメンさんは何を着ても似合ひらしい。羨ましい限りだ。

王子は小走りで部屋に入つてみると、手元の紙を見ながらアレク様に声をかけた。

「実は「」の部分で聞きたいことがあって……あ、君は……、エリちゃん？」

そこで私の存在に気付いたのか、彼はしかめつ面だった形相に笑顔を浮かべ。

それからアレク王子と私を見比べると、困ったよひに頭をかきむしりました。

「え…っと、今はお取り込み中、かな?出直した方が」

「いえ、いえ、私の用事はもう済みましたから!…」

どう見ても、ハーベイ様の方がお取り込みのよう。

私の目的は、まあ達成されたんだし、ここはハーベイ様に譲らないと。

私は軽く頭を下げる、退室の体勢をとる。

部屋を出る前にちらりと見えた2人の王子は、なんだかとても真剣な顔つきで書類とにらめっこしていた。

外に待機させていたリースンに声をかけ、私達は自室へと向かって歩き出す。

「それで、謝罪はうまくいきましたの？」

「あー、うん、そうですね、うまくいったというかなんというか」

そもそも私が謝るようなことはなく、単なる勘違い、だつたんだけど。

それも、アレク様本人が仕込んだっていう。

「まあそのことは終わつたことなので」

「なんですが、何か怪しいですわね。はつきり仰つて下せつな」

「えーと、実はあれはアレク様の狂言だつたっていうか」

「狂言…嘘だつたんですか？あのことが？」

「そう、それで…」

2人でそんな会話をしながら廊下を歩いていると、後ろの方から誰かの呼ぶ声が聞こえてきた。

「？」

私の名前だった気がして振り返ると、やけにはやつかも部屋でお会いした第1王子様のハーベイ様が、手を振っていた。

「Hiroちゃん……」

走つて来たんだら、ついからかはんだ様子で王子は私達の元へやつてくると、足を止めました。

なんなんだら、もしかして私に用事？

でも王子と会つたのは、昨日のHスローーの時とやつもの部屋と、まだ2回目で、今更に話もしてこないのに……。

私が訝しげに王子の顔を見上げると、彼はやつぱりお美しい顔に極上のスマイルを浮かべると、予想外の言葉をかけられました。

「よかつた、君に少し話があつて。今からちょっと時間、ある？」

## 08 お兄様と、3時のお茶です。

時間帯的にもおやつの頃合いだったのと、私と王子は中庭でお茶するようになりました。

ポカポカ陽気で天気もいいし、風もそんなに強くないから快適…！  
太陽の光が直接当たらないように、パラソルのようなもの（もつと  
高級そうな感じですが）をさした下で、私達はリースンの入れてく  
れた紅茶とお茶菓子をつまんでいました。

「珍らしい日は、昼寝とか、いいと思わない？」

キラキラした瞳で、ハーベイ様が私にそう尋ねる。

「はい、そうですね」

私は王子の言葉にそう返しながら…内心すくなく惑っていました。

急に、今から話をしよう、なんて言われて、2人で中庭でお茶なん  
かして。

しかも用事がある風だったのに、一向にそれに触れる気配がない。

一体何をお考えなのか。

気になつて、せっかくのお茶の味も色とりどりのマカロンの味もよ  
く分からぬ。

心中を探るように王子の顔をじっと見つめていると、視線に気が付

いたのか不思議そうに私を見返した。

「…どうしたの？そんなに俺の顔を見て」

いえ、その

どうしたも何も、あなたが話があるつていうからここに来たんですね。

もちろん、美形な王子様とのお皿のお茶は楽しいですし、かつてはいお兄さんは田の保養にはなるんだけど。

「……ハーベイ様、そろそろ、私を呼びとめた理由、教えて頂けないでしょうか」

さすがに我慢の限界。

正直、氣になつて氣になつて仕方がない。

耐えきれずそう尋ねると、ハーベイ様は不満げに口をとがらせる。

「えー、ヒリちゃんはアレクのお嫁さんでしょ? つてことはつま  
り、俺の妹、ね? なのにそんな他人行儀に、ハーベイ様呼びはひど  
くない? 」これは、『お兄ちゃん』って呼ぶべきだと

「え」

……まあ、確かに世間一般的には、ハーベイ様は私の兄、義理兄です。

そして私の質問は無視ですか。

けど、さすがの私も会つて間もないお方を、しかも王族に「お兄

ちやん「なんて氣易く呼べるほど、肝はすわっていない。

しかし、「」の人気がそれを望むのなら、私は最大限努力しなければ！

「お、お、お兄……様」

ちやん付けは、まだまだ難易度が高いよつです。

せめてお兄様呼びで勘弁してトセ。

だけど、ハーベイ様はこの呼び方でも納得してくれたみたい。

「うん、まあ及第点かな。それじゃあ今度から、俺の「」はお兄様、  
つて呼んでね」

そう言つて、ぱちりと氣障なワインクを投げてきた。

唯一の肉親リアルお兄ちゃんがそんなことしようものなら、鳥肌立てて全力で気持ち悪い、つてつっこめるけど、こいつのお兄様は似合つておいでなので、何も言わない。

「「」ほん。では、…お、兄様に質問があるんですが」

まだ言い慣れていないので、多少つかえ気味なのは御愛嬌と言つことで流してほしい。

「ああ、うん、今日君を呼んだ訳ね？」

今度はきちんと認識してくれたようで、やっと本題に入れそつ。

「「うーん、とりあえず、一つ田としては、アレクのお嫁さんつてい  
う」と、どんな人なのが気になつたから少し話してみたくなつて」

オレンジ色のマカロンを指でつまみながら、お兄様は私を頭の先か  
らつま先まで眺めた。

そして再び私の顔に目線を戻すと、にやにやした笑いを浮かべた。

「なんせ、あのアレクが自分から妻にしたいーーって国王に直々に  
嘆願しに行つたくらいだからね。兄として、そりやあもう氣になる  
でしょ」

「え、嘆願、ですか？」

「そう」

何それ、私そんな話、初めて聞いたんですけど

ちらりと後ろに田線をやると、リースンも同じよつて田を丸くして  
いた。

どうやら彼女も知らないことらしい。

「その顔は、どうやらこの結婚が決まつたこきぞつも知らないよう  
だね」

「はー、実は全く

そもそもアレク王子様の存在を認識したのも、つい24時間ほど前  
ですか？」

「どうじつ風に説明受けてる? 今回の結婚に関して「

「どうじつ馬鹿正直には答えなかつたけど

「やつですね、1週間前に、突然第3王子と結婚が決まつたからよ  
るじく！みたいな感じでしたけど」

本当にそんなやつくりとした説明だった。

言われば、さすがに早つ！？とか急だなとは感じたけど。

だけどお兄様の次の台詞は、私にじつて爆弾発言だった。

「実は、今回のそれ、2年前から既に決定事項だつたんだよね」

何ともなしに言つので、つかり聞き逃すといひだつたんだけど。

2年前…それつて、私がこひちに飛ばされてからすぐつてこと？？？

そしてそれは王子が留学に行くその前後、ですよね。

?????

頭が混乱する。

だつて、私その時にアレク様の存在は、当然知らなかつたし、な  
にその時に王子が私との結婚を決めていた、だつて！？

謎だ、謎すぎる。

私が説明を求めるやつにお兄様を見ると、彼はゆつくりと頷く。

そして、その口から色々と衝撃的な事実を語り始めました。

## 09 アレク様への、謎だけどんぐん騒ります。

アレク・ガイナ・ブリストル。

父はエルミニ王國国王ラレイ、母は國一番の美女と名高いセシル。その間に生まれた4番目のお子、第3王子。

幼い頃から頭脳明晰で、3つの時からその能力を遺憾なく發揮し、その為神童と世間では呼ばれていた。

その才能は王族のみならず、貴族たちや国民も認めており、彼が8つになつた頃、国王は将来彼に王位を譲ると宣言した時も、誰も驚かなかつた。

頭がいいだけでなく、人を使うことにも長け、その上王族の血を受け継いでいるため容姿も極めて美しい。

ただ、彼には一つ欠点があつた。

感情が欠けていたのだ。

頭がよすぎるからだろうか、喜怒哀楽、その気持ちが皆無だつたため、どんな時も無表情で、まるで人形のようだ、と皆からは囁かれていた。

それは国王を含めた家族も心配していたことだつた。

王としてはこれほどまでに優秀で適任な者はいないが、果たしてこの感情のなさはいかがなものか。

何をするにも冷静沈着で、決して取り乱したりせず、世の中を達観して見ていた王子は、幼いのに子供らしくなく、そのことだけが不安だった。

ほしいものはときかれても、何もないと言つ。

好きな物はときかれても、何もないと言つ。

生きながら既に死んでいるよつとも見受けられた。

そんな王子が12になつた時、留学の話が持ち上がつた。

そういうところはあるさせよ、能力的には問題はない。

将来のためにも知識を深めておくことは大切だといつことになり、海を越えた国へ向かうことが決まった。

勿論、王子に異論はなかつた。

その、出発の半年ほど前のことだつた。

今まで感情のない人形だつた王子に、劇的な変化が見られたのだ。今まで誰も寄せ付けないびんと張り詰めた空気を纏つっていたのが、急に柔らかくなり。

笑つたり、悩んだり、色々な表情をするよつともなり。

それは年相応の言動に見えた。

もちろん神童としての才能はそのままでだ。

急激な変化に周りは驚いたが、それはむしろここだらう。

これで世継ぎとして不安はなくなり安心していた頃だつた。

留学に旅立つ前田に、彼は国王にあるお願いをした。

「とある女性と結婚したい」

もううん、王も初めは渋つた。

未来の国王の結婚相手は、政略結婚だ。その時点で相手も決まつていた。

けれど、王子は引き下がらなかつた。

それなり国王になることをやめる、と。

そこままで言つた。

これにはさすがの国王も焦つた。

だからある条件を付けることとした。

「留学期間は4年だ。それよりも早く成果を出せたら認めてもいい

その言葉を胸に刻み、王子は他国へ旅立つた。

そして王子は見事にその言葉通りのことを成し遂げた。

十分すぎるほどの恩恵を本国にもたらした王子に、さすがの国王も首を縦に振るしかなかつた。

相手方には、何も伝えていなかつた。

「どうせ一時の氣の迷いだろ。」

そう軽く考えていたのだ。

だが現実は違つたのだ。

王子が帰国すると、慌てて国王は相手に王子との結婚を記した手紙を送つた。

国王からのそれは勅命だ。断ることとは許されない。

そして1週間後。

その娘が、王子の元へ嫁いでくることになつた。

「……で、エリちゃん、君がその相手だつていふこと

お兄様は話しあると、紅茶をすすつてにっこり笑つて私の目を覗きこみました。

けれど私は、美貌のお兄様に見つめられていたら普通はドキドキす

るだらつのこと、それビビりじゃない。

ただ、呆然としていました。

だつて、だつて！！

「あ、の」

もしその話が本当なら、私はやつぱり王子とどこかで会つていることになるのに。なのに全く記憶にない。あんな美少年、一度会つたら絶対に忘れない自信があるのに！

「ハーベイ様、実は私、アレク様とお会いしたことがないんです。でもその説明だと、アレク王子は私と面識がある風ですよね」「うん、直接会つて、話もしたつて言つてたからね」

話。

一生懸命普段から使わない頭をフル回転させましたが、やはりダメです。かすりもしない。

私の記憶力が本当にダメダメなのか。

それとも……。

私は一つ、気になったことがあった。

王子が留学する半年前。そこで私達は会つたようだつたけど、その時の私は、まだ元の世界じゃないんだろうか。

だつて、私がここに来たのは、正確には2年と1か月前。そして王子が留学に行かれたのは、今から2年と1か月前。

……「」のタイムラグはなんなんだね？。

ほら、やつぱり私、こっちに来ていない時だ。

それじゃあ王子の話は嘘なの？？？

もしくは。

人違ひ、とか？

思つたことをそのまま口に出すと、残念ながらハーベイ様は否定した。

「アレクは、間違いなく君だと言つてるよ。名前もエリで、年も自分より上。髪の色も顔形もあの子が言つてたのとぴたりと当てはまる。それに、黒田黒髪の子は珍しいからね。そういう同じ人は見つからないよ」

そう、この世界、日本では当たり前すぎてあふれてる黒に遭遇する率が、ものすごく低い。私も今まで一回もお皿にかかったことがないくらい。

ところが、やはつ王子の「」とは本当…？？？

結果的に、私はますます王子との結婚に疑問をもつ結果となつたのでした。

## 10 アレクサンダー、一度目の来訪です。

少し寒くなつてきて、私は思わず体を身震わせた。

やつぱり夜は大分冷える。この辺りで今口は眠るにしようか。

読みかけの本に葉を挟むと、私は大きく伸びをした。途端に体がばきばきといい音を立てる。

かなり長い時間、同じ姿勢で居続けたから当然だらうけど。

それから本を元の棚にしまい、ベッドに体を滑り込ませよつとした時でした。

「ンンンン。

唐突に、扉がノックされた。

「！？」

こんな時間に誰だろう？リースンは、夜も遅いからと軽くに浴室に返したから、彼女だろうか。

私はあまり疑問も持たず扉の前に立つと、鍵を外した。

「リースン？」

けれどそこにはいたのは彼女ではなく。

「やあ、Hリさん」

満面の笑みを浮かべていた、アレク様…もとい私の旦那様でした。

……お昼にハーベイ様に聞いた話を思い出しました。

私は覚えていないけど、王子は一度会つていて、それ以来私と結婚したくつて王様にお願いしたってもつ。

その後、真相を確かめに王子に会いに行つたんだけど、あごにく留守だつた。なので次に会つたらそのことを聞いてみようと思つていたのだ。

確かに、今日の前に王子がいるところのは、聞きだす絶好のチャンスではあるんだけど。

それよりも、私は現状にびっくりしていてそれだけでありますませんでした。

「！？え、えっと、アレク様？？？」

そう、それは今時間。

時計を見れば、もう2時を回つていて、そんな深夜と言つても過言ではない時間帯。もちろん、14歳の少年が起きている時間でもなければレディーの部屋を訪ねるのにも相応しくないお時間。

「どうされたんですか、こんな遅く」

私の抱いている疑問はさておいて、とりあえず、外ではなんなので部屋に招き入れてからさう尋ねると、王子はあざけない表情のまま答えた。

「うん、たまたまエリさんの部屋の前を通りつたら、明りが洩れてい  
たから顔が見たくなつて」

え、だつて2時だよ、2時。草木も眠る丑三つ時、つて言われるほ  
どの時間だよ？それなのに、こんな時間にふらふら廊下を歩いてい  
るなんて…。あなたは不良少年ですか。

「……アレク様、その、お部屋に来て頂けたのは嬉しいですが、今  
日はもう自分のお部屋にお帰りになられた方が」

けれど私のそんな言葉も、王子には全くの馬耳東風なようですが、すつ  
ぱり無視するとベッドでじりじりと横になつた。

「！？」

それ、私のベッドなんですが……。

「あ、あの」

「ここで寝るからいこよ」

いや、ダメですつて……なんてことを仰るんですか」の人は…！

「だつて今朝も一緒に寝たじゃなー」

いやいやいやそれは、王子が勝手に忍び込んで来たんですね  
！？私の断りもなし！。

「とにかく…駄目なものは駄目です…！」

わざわざ起つて、王子を起しやすべく私はベッドに歩み寄つ……

「つて、あれ、アレク様？？？」

そのまま横になつた王子は、ピクとも動かない。  
目をつぶつて横になつてゐる。

嫌な予感がしたので試しに揺さぶつてみるが、起きない。

やがて口から洩れたのは、規則正しい寝息でした。

「…………」

いや、寝るの、早くないですか？

そんな、5秒と経たないつこつていつ勢いでしたけども。

うーん、どうしようか、まさか眠る王子を部屋に追い出す訳にも行かないしなあ。

しかし、こう改めてまじまじと見ると、王子は本当に美しい顔をしてござつしゃる。

おどぎ話の王子様も、ギリシャ神話の神様たちも裸足で逃げ出すほど。

今さらそんな感じなんだから、もうすこし大人になればそれはもう、ものすごいことになつやう。

と。

私は今にして、初めて気が付いたことがあった。

象牙のようななめらかな白い肌。じこじこなしか、それが青白い。

「……」

眼のには、つむすらと黒い影。おそらく、クマと呼ばれる代物。

「……」

彼は14歳だ。でも、それにしてもこのやつれぶりはどうなんだろう。

顔と雰囲気と、まるでちがわない。

そう言えば。

私はさつき部屋で見た光景を思い出す。

部屋中に積み上げられた、いかにも難しい文面の書類の山。

ハーベイお兄様と険しい顔で話されていた王子。

そしてアレク様は将来を担う未来の国王様。

リースンも、王子は幼い頃から職務をこなしていた、って言っていた。

なにばこんな遅い時間まで、アレク様が起きて何をしていたかなんて、想像に難くない。

むしろ、一番最初に気が付くべきだった。

それに昨日の部屋に忍び込んできた時も、夜遅く、って言つていたし。

そんな時間になるまで、王子は王子としての職務を全うしていたんだろ。

道理で疲れるはず。

そのまま横になつたら寝てしまつははずだ。

ならば寄り道なんてせずに、自分の部屋に戻ればよかつたのに。

なんでそれをしなかつたのか。

その理由を考えて、それから思い当つて私は思わず赤面する。そして、

「…………はあ

深い深いため息。

もしもハーベイお兄様の言つ通りなら、アレク王子の言葉のままを信じるなら。

アレク王子は、本当に私に会つに来たのだろ。

「はあああ

部屋にはソファもある。私一人眠るには十分すぎる広さだ。

私は深いため息をもう一度つくと、王子が風邪をひかないようにモ<sup>モ</sup>布をかぶせてあげて、ソファの方へ足を向けました。

## 11 そんなんに違つたですか、アレク王子は。

あれから2週間が経ちました。

あれ、といつのは、もちろん、アレク様と私の結婚式から、ですが。私は未来の王妃としての教育を受けないと、といつこと、最近始まつた試練の数々に耐えている。

今はその中の、いかに美しくドレスを着こなすか、といつ、私にとってはあまり必要性を感じないもの。

けれどリースンいわく、これはすぐ大事なことじつ。

一国の王妃とは国を代表する者、つまり国の顔なんだから、ドレスの着こなし方、歩き方一つとっても優雅で美しく洗練されていなければいけないと。

そして今は、まずは自分に合つたためのドレスを作つてこる最中なんだけど。

そのせなかに、侍女の一人が興味しんしん、といつオーラをありありと醸し出しながら聞いてきました。

「あの、Hリ様。最近、あのアレク様が、毎夜お部屋に通われて一緒に寝てこるつていうのは本当なんですか？？？」

「…………ええ、はい、そうですね」

あれは結婚式の次の日。真夜中にアレク王子が訪ねてこられた後、

王子は私のベッドで寝つてしまつたので、私は仕方なくソファで寝よつとしたんだけど。

王子がしつかりと私の服の裾を掴んでいたおかげでその場から離れられず。

そして私もいい加減眠たかつたので、一緒にベッドで寝ましたとも――

といふが、その前の日にも同じベッドで寝ていたんだから、この際1回も2回も変わらないかなと開き直つてしまい……。

それから、王子は職務が終わつてから、毎晩夜中に私の部屋を訪れて一緒に眠る日々が続いている。

なので最近は起きて待つてはいるんだけど、どうしても睡魔に耐えられない時は先に寝て……。朝起きると、アレク様が隣にいたりする。だって王子は私の部屋の合意カギを持っているし。どうやら、結婚式の夜も、それを使って忍び込んで来たらしく。

慣れてしまえば一緒に眠るのも案外平氣なもので、初日はあれだけ大騒ぎしたのはなんだつたんだろうと言つたいくらい。

……まあ、旦那様つていうより、可愛い弟ができるの子と寝てるつていう感覚が近いと思つ。

一緒に寝てるからと言つて、勿論、やつこ「ひ」とやつこ「や」があるはずもないですよー? 本当にただ一緒に眠るだけなのだから。

ちなみにこの質問、既に何回聞かれたかわからないくらい。

彼女達の他にも、礼儀作法を教えてくれる先生や、お城の他の侍女たち、それに王様や王妃様、第2王子のマエスト様に第1王女のマリア様まで。

別に結婚した相手が妻の部屋に通うのは当たり前にことなんだけど、それでもこれだけ話題に上がるのには。

一つは王子の年齢。14歳といつ、まだ若い年齢があるんだけど。

もう一つは…。

「そんなにアレク様は昔と違うのですか??」

その度に、何度も返した私の質問。

すると決まって返つてくるのがこの答え。

「それはそれは…あんなアレク様は、以前では考えられませんもの!!」

アレク王子が昔、感情がなくてお人形のようだつていうのはハーベイ兄様から聞いた通り。

王子としての職務を淡々とこなし、何事にも執着せず、日々をただ漫然と生きているだけだったというアレク様。顔は綺麗なのに全く表情がないから、余計に人形の様だと。

そんな王子が、自分の意思で私と結婚したいと王様に直談判しに行き、結婚したいがために2年で留学から帰ってきて。

感情も表情も豊かになつて、仕事を生き生きとしなし、その上終わつたら毎日私の部屋に通つ、なんていつゝとせ、昔から考へたら、本当にあり得ないいらしー。

「アレク様をあんな風に変えるなんて、一体どんなことをされたんですか？」

「あんな風、ですか」

いつも嬉しげに、満面の笑みを浮かべて部屋にやつてくるし、寝ている時の表情もあどけなくて可愛らしい。時々夢の中で嬉しいことでもあるのか、笑つたりしている。

朝起きて、寝ぼけた瞳をこすりながら、おはようと私は口に言つてくる時は、どじかほわんとした穏やかな顔。

……私は、今の王子しか分からないのでなんとも言えませんが、少なくともみんなの言つ昔の面影は、全く目に見えません。

その上、それを変えたのは私だつて言つけれど、やつぱり王子と会つたことを思い出せないので、どんなことをしたのかつて聞かれても困る。

王子には、実はそのことをまだ聞けていないのだ。

部屋に来るのがいつも遅い時間なので、早く王子を寝かせてあげないと、とこう思いが先行して聞けずじまいなのだ。

それに、王子は部屋に来ると大体すぐここへと歸つてしまつので、会話なんて本當に、いつも分ほどだと思つ。朝起きたら、すぐこの部屋を出て仕事しに行かれるし……。

まあ、いつか聞ける時間ができるだらう、その時に聞けばいいか、  
と今は思つてゐる次第なのです。

## 12 わりと回かご用ひのせ、今日が初めてですね。

そして、その機会はその日の夜にやつてきました。

いつものように、本を読んでいると。

扉がノックされた。

時計を見ると、まだ12時も回っていない時間。  
日付も変わっていないのに、まさかもう?

そう思い扉を開けると。

「Hirokuni...!」

予想通りのお方が私の部屋の前に立っていました。

「今日はすこいぶんと早いんですね」

いつもなら日付が変わったからこないに来られるの。

するとHirokuniは、にこりと笑つて答へました。

「うん、思ったよりもまさかだった。そのお陰で今日は早く仕事が終  
わったんだ」

だからHirokuniに会いたくて急いで来たんだよ、Hirokuniは言つて  
くれた。

うん、それはす「」べ嬉しい。気持ちは嬉しいけど、でも。

私は相変わらずの王子の様子に、思わず苦笑しながら口を開きました。

「…だからと言つて、こつもそのような格好だと風邪をひきますよ？」

そのような、とせ、このお風呂上がりの格好。

湯冷めてしまつたではないかつていうほど薄手の生地の服に、まだ濡れたままの髪の毛。廊下に少し、ぽたぽたと水の滴が落ちるほど。

水も滴る「」い男… とこには幼いけど、でもそんな表現がぴつたり。けれどいへうそうだとこても、まさかこのままにしておく訳にもいかない。

私は急いで部屋に招き入れると、椅子に座らせる。

それから部屋の隅にかけてあるタオルを持ってきて、王子の頭の上にかぶせると、じこじこ拭いてやる。

「こつも」めんなさこ、 ハリさん

「せう思つてゐるな、きちんと髪の毛拭いて下せこ」

この世界、電気がないからドライヤーなんてものも存在しない。だから王子が風邪をひかないように、しっかりと念入りにタオルで水気をとる。

拭きながら王子の髪の毛をまじまじと見るのが、実は密かな楽しみ

だつたりするのだけど。

だつて日本ではなかなかお田にかかるない、綺麗なブロンドの髪。しかも全く痛んでなくて、すごく羨ましい。

私なんて、一度も染めたことないのに枝毛、ありまくりだし。

やがてそれが終わると、私は元の場所にタオルを戻して、ベッドの毛布をめくる。

すると王子がその中に体を潜り込ませて、私は燭台の火を消してそのまま眠る…っていうのがいつものパターンなんだけど。

今日は少し様子が違つた。王子はその場から動かないで座つたまんまだ。

「?.まだ寝られないんですか」

「うん。だつて今日はいつもより早いんだし、上つたことお話ししたいなあつて」

「でもいつも遅いんですから、たまには早く寝た方がいいんじゃないですか?」

ばらつきはあるけど、平均睡眠時間は5時間はきつてゐと思つ。

毎日過酷に仕事をこなす14歳の王子様には、その睡眠時間じゃ足りないんじゃないだろうか。そう思つての私の発言だつたんだけど。

アレク様は途端に頬を膨らませた。

「大丈夫だよ、全然平氣だから」

「ですが……」

なおも食い下がる私に、王子は今度は悲しそうな顔になると手を潤ませて、瞳をつぶつぶる攻撃してきた。

「…………」

だから、本当に王子の手は卑怯だ。そんな顔されたら何を言へないじやないですか。

ちなみに今のように、愛玩動物のような視線の王子には全敗中だ。

私は諦めのため息をもらすと、ベッドを元通りに直し、王子の前に座りました。

そう言えば。

向かいあつてみて気が付いたんだけど、いつしてアレク様ときちんと向き合いつつて今日が初めてかもしれない。

毎日ここに来ててくれるけど、時間も時間だから会話もやじやこにすぐ眠りこづくし、朝は朝で時間がないから、話なんてほとんどできない。

なんだか変な感じだ。

結婚して、一緒に寝てゐるのに、今までほととど会話したことがないだなんて。

そしてアレク王子もやじやこ私とおんなじことを考えていたようだ、

小さく笑い声を洩らすと嬉しそうに私へと視線を送った。

「ナリ言えば、せっかく結婚したのに、いつしてHリさんとお話しするのって初めてだよね」

「そうですね」

「お城での生活は、もう慣れた?」

「はい、みなさん優しくして下さるので…。アレク王子じゃ、大変ですね。毎日朝早くから夜中までだなんて。その、体調とか大丈夫ですか?」

「うん、僕は別に平気だよ? もともと体は強いし、それに」

そこでいつたん言葉を区切ると、まんまるな青い瞳で私をじっと見つめ、

「Hリさんの顔を見たら、疲れなんて吹っ飛ぶよ

そしてとどめに花がほこりぶ如く甘やかな笑顔を向けてきた。

「…………つー?」

…その破壊力に、私は思わず椅子の上で突っ伏す。

い、今のは反則だ、絶対に。

なんですか、あの、あの、あの極上の微笑みは。

やばいぞ、眩しそうに溶けそうになる。

最近は見慣れてきた王子のお顔だけど、いひ、不意打ちで来られると反応に困る。

それが自分に向けられているものだと思うと、恥ずかしいし照れるし、じう、胸の奥がむずがゆくなる、そんな感覚…。

だけど、照れてどうする、私。

相手は大きく年のかけ離れた男の子。そんな子に本気で赤面するなんて、私は駄目な大人だ。  
しかりしろ、私！

心の中でエールを送ると、私はなんとか平静を装つ。

「そ、…それにしても、アレク様は昔からそんなにたくさんお仕事をされてたんですか？」

「うん。僕が次期国王になるって決定した時からこんな感じかな」  
なんでもない風にそう答えるアレク様。

確か、幼い頃から國の中枢部の政務をこなしていたんだっけ？

その時は、今もやうだけども、と幼い頃、だつただろうに…。

辛くはなかつたんだろうか。  
嫌ではなかつたんだろうか。

だけどそんな私の疑問に、王子は少しだけ遠い目をすると。

「与えられた仕事をこなすのは、苦ではないんだ。それが当たり前だつて思つてたし、その能力が認められて次期国王になつて言われた時も、何の感慨も感情もなかつたていうか…。ああ、そつなん

だつてぐらー』

あの頃は本当に、感情がなかつたからね。

そつ言つた王子の言葉と、みんなの言つていた昔の王子の姿が重なりました。

『感情のなかつた王子様』

けれど、今日の前にいる王子は、すゞく感情が溢れています。

嬉しい顔、拗ねた顔、悲しい顔…。

そしてそれを作り出したきっかけが、私だつていう事実。

これは、今王子に尋ねる絶好のチャンスなのではないだろうか。

どうして王子は私を選んだのか。

そして、本当に私がアレク王子を昔の人形のよつだつたものから変えさせたのか。

私はゆつくつと息をはくと、思い切つて王子に尋ねてみるとこしたのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6916z/>

---

私と年下王子サマ

2012年1月8日01時57分発行